

廣益俗說辨七

士庶婦女

13
954
8

廣益俗說辨卷十三目錄

士庶

新

薩摩の忠度能く短冊と侍身一説

同

常陸防海の仙とかな説

補

仁田忠常富士将の野猪とそび子説 附 忠常富士の

人定よく地獄とあぐね説

一

細比奈義秀ハ巴子といふ説 附 義秀曾我時政と

系摺りの説

補

同義秀鬼の格よくわろ説

補

最明寺の附猪頭と血子説

補

佐和源氏傳常世ノ記

補

結城入道北條ノ記

補

徳村彈正左衛門ノ記

新

大田道灌傳世ノ記

補

松田左馬介忠義ノ記

二

小栗判官兼氏ノ記

補

日下左衛門ノ記

二

飛彈内通ノ記

補

信濃國孝子ノ記

廣益俗說辨卷十三

井澤長秀 輯録

士庶

新

薩摩守忠度ノ記

俗

佐々木忠度ノ記

後

佐々木忠度ノ記

後

佐々木忠度ノ記

や

佐々木忠度ノ記

今按ふに後冊ハ忠度ノ時ニおゝそれより百三四

十年まで長江法所より一海にけり。保平盛衰

兆あり六江忠度ノくひとわねとす。後(多)物具

とぞう傳けぬよむの巻物なり陣布よかひ
所北見よはあやもねほくわぬ中よ旅宿より題
あそりよそおれ下かき紙布とせは死やうひ
わあーあうゆーと度とかれきりとりとわさとも後
冊の半とんく次 平家物語よへあひつゝあひつゝ
又とそくえれハ旅宿より紙布とせは
一首よめれうと何う。ハ秋忠成家集
あひく次東見光云是肌百首云云

新常陸坊海子仙と云ふ伝

俗伝云常陸坊海子ハ園城也此者明後ヨ義經に仕
ぬる館の合戦の希山中に逃入る仙人と云ふり今にい
せりて富士浅間湯殿山と云ふ所と云 余これ
と云ふ

中の事ハ新伝ハ海子仙と云ふれりハ事ハ此と云ふ
事と云ふハ此ハ海子仙と云ふれりハ事ハ此と云ふ

今傳ふよハ難題ハ明乃金陵ハ唐侍より者仙
形代たりむわろ人形代出て山より人形代と云ふ
唐乃いふ家ハ老母わり物事事わくハ次世つる不
孝乃神仙なりハ中々云ふと記と云ふハいふ
海子と云ふ記ハ君とすく生代じハ海子不忠ハ神仙
なるんハ海子ハ仙家ハハ彼代ゆすくハ後と云ふ
倫理と云ふハ其罪すくハ刑ハわかれハ又海
子今ハなうハ人形代と云ふハ此と云ふハ事ハ此と云ふ
二程合書ハ昔わろ人形代ハ後わろハと程に同

系光卿相とていへうに一通し初まて矢張り
川よわさす系光のひつきて二二の幕代を飛
かともわさして麻いさやの山よりまう系光
残すていさくまわし十一幕よりこれに
侍衛とて次七旬よわさふさくうに物代に
手ねしあふ。今公神憫れとてまかり迷
惑と見則山神の駕をふとてうひか
運命
あまよりぬ諸人後よりわひわさへし
系光
系光の代を終り果して暁よ及て系光
わが代仁田忠常の備とてあしとて代と
あふ

又和田親長仁田忠常人元入院とあはれ
三年六月一日將軍家
伊豆の奥待合よ着
伊東の山の中ふ大洞わさぬこと
將軍わさしあふ已刻よ和田平左衛門
見さる親長とて代をまて彼か
やていさくは元親
伊豆の山の大蛇わさて親長と
てきりさるあふとて三日將軍家
將軍よ渡河わさる彼山の幕よ
代きさるあふとて仁田四郎忠常と
あふ

全後六人なり。右常川御領と賜ふ人。元入事
 今日幕下に少く出い。四日己の刻。仁田四郎忠房
 人定と出て。ゆり。素直。還。一日一夜を待せり。此洞
 せ。く。く。と。躍。と。く。と。経。過。と。あ。る。と。次。々。と。行。と。か
 る。と。人。足。く。く。と。公。衆。と。い。ふ。ゆ。り。ひ。ま。後。は。く
 松明と。九。活。次。乃。結。中。結。の。多。り。て。是。代。々。と。次。幅
 幅。の。子。方。と。形。く。と。き。り。と。度。り。其。先。途。と。大。河。の
 逆。浪。の。お。お。り。あ。り。て。渡。が。て。な。り。河。乃。向。は。大。光
 わり。奇特。代。人。お。り。向。岸。從。四。人。お。り。地。も。う。死。と。思。ふ
 彼。靈。乃。割。よ。う。て。忠。楊。の。御。領。と。何。と。授。け。し。今。後

今。て。ゆ。り。事。所。と。わ。れ。あ。れ。と。う。わ。り。あ。り。て。い。ま
 ね。へ。

一 朝比奈義秀ハ巴子より脱附 義秀乃我時紋と云
 摺。り。乃。後

信從云朝比奈三郎義秀ハ和田左衛門義盛の二男母は
 巴女なり巴より先ハ本多義仲の妻なり元暦元年義
 仲が没し乃後巴信列より子孫家傳をば朝比奈家より
 あり。乃女おれ。色。強。力。此。女。も。う。り。お。り。今。井。桶。口。の
 妹。お。れ。ハ。此。女。より。か。う。と。す。て。に。謀。と。り。あ。り。此。の
 定。り。と。和。田。義。盛。大。力。此。女。を。ば。と。り。と。い。ふ。と。あ。り。

中て取て妻やう一義秀様より一母の力量より
まゝなふめやなうひあれたる方なり義盛は後おきて
願ふにたゞ義秀が義成の時分はよわひに物と
まゝなり

今安ふよ朝比奈義秀の八巴の子と云事わす細く
人を知るに元暦元年より東鑑盛衰記平家物語を
考ふに本當義仲死に元暦元年なり東鑑は
後仁和義盛死に建保元年なり朝比奈三十
八歳とわく元暦元年より建保元年までわくふ
二十年なり義秀の年齢と八年相違とこれと

と云て見れば巴の子にて八育へり後わたり人をも
古本東鑑より義秀の年齢を二十八と記しり
より後八巴の子と云事信す人きり此後二
三ハ義秀と云義成の時分はよわひに物と
一義成兄の工後後とて各よりなりと建
四年朝比奈富士に後より元暦元年より
義秀の時分は力量より一ハと云事わす
秀の年齢より九歳より十歳より一ハと云
わすなり

補

朝比奈義秀見ゆわす

信茂云建保元年和田義盛謀叛代々軍やふれ
相比奈義秀ハ形はつて思ふ様はわきうも得ず
して一生恙なくやう

今按ふ小東艦と考小建保元年八月和田義盛
叛逆して軍敗る相比奈義秀をひは殺す等海
濱よか形は掉て安房國小形とひくも勢も百餘
船六艘とあり。神社考云義秀自房州趣高梁國
對馬嶋人謂余曰高麗金山海在朝夷名祠浦人
時祭之云々是等の説よりていひせざるべし

補

最明寺時頼廻國の説

信茂云最明寺平時頼民よりありみ代見より
と云ふん中あり小形と云ふは國城なりと云ふ

今按ふ小羅山子道春曰時頼乃修禪と云ふ人の
鬱訴ときんが為なり民よりいひてみをさふ
見てわざとんとするもろろ海より小形諸おれとも
賢れたより凡そ我ハわが地國表よりていふと云ふ
のひかり地毛を喰て疵ともやと先人の隠辭と云ふ
秘さる所ハわきうもつていふと云ふ事ありありハ
民乃々一み代同史と諸國よりつていふと云ふ事
然るに是ハ君ハ君かりともいふと云ふと後漢書

中にもわきかきしりしに修りさるる後日ゆ
へるも○予按おむしるも海うけて河伯化
して白龍となすもあふれしを昇といふ者
矢張りおちて執るたれ目と射する何伯ゆて
け事と天帝よりいふ天帝はさしき系海に汝お
か神矢とちかは昇ゆふりて汝を初んや汝
いま虫類となす人をもあふ初る事と理か
る恨むるはさるる事文類聚よりいふ
ちれれよりいふは時れ天下に執持めて威勢
海に漁人おれしも獨身や四伐ゆしは

乞食法師に果なるるに所在語も吞舟魚も
あれし一おひて蟻蟻も先ん割せしは
吾代離るる故なりとわきハ不慮に愁わやう
経るや頃同疎魯理傳を見たり疎魯理とて御
里姓氏と傳ゆし疎魯泉別地志に用樓栗形と和
中豐后太田ははるて親率ゆるあわね目太田清
臣然るるをせしむるもわきとては日不然とて
にみたりとされしも若一民もそ然たりとわ
けらわたりしは平時なりとて疑難をさく
足見たり諸臣皆とて然るるもあはれに國然

そつりハ其事に似て人々此をわらへる所下義
かきよやうき場ありあつたふ虞き一由さ如何や
まう次太田まきとまひまゆハ我非武たり天下に
敵あり申さひむらうき一てゆくときたきり我
とまうんや汝等がう稱ていふ處うはと所いり此
いり見く後ハたのくゆくうきまきともゆきひ
いさめんともうきもの取一それより三日して後右
岡疎尊理とて世とよあつて起事ハな他とて同
世後ハ疎尊理ううきまきう起けりるゑ此賈
人談る山よめりとして山の麓よいうき起るき

天忽よきまき黄ばるうう一天狗忽死とて死
あり賈人を見ていさくわき今食ハ飢きう汝と
ふてうきまき一其いさひいさかてはまき
賈人いさくわき運はまき今日公おわハ奉まきりお
くはまきまき一ともかきまき一あふ一但一
それうは稱ていふ神通代き後ぬ移うきは
一目見せうあふ一たあハ死まきともうきあふ
天狗ふまきかんちうきまきまきせて非過とてん
へまき大身を見せりめんといさむとくまき長
ふ山よりきりる賈人たきりまきけよハ小身を見

結城入道より大荒後浦より事状より二三日より後
 より元新より入るる遠く縁終り無相と銘より
 僧より元新より一より縁終りより一よりひき
 今按ふに後浦より一より縁終りより一よりひき
 入るる遠く縁終りより一より縁終りより一よりひき
 へ下浦より縁終りより一より縁終りより一よりひき
 一より今度後浦より縁終りより一より縁終りより一よりひき
 今度後浦より縁終りより一より縁終りより一よりひき
 可責と云ふより一より縁終りより一より縁終りより一よりひき
 許中遺云縁相より一より縁終りより一より縁終りより一よりひき

仍中より一より縁終りより一より縁終りより一よりひき
 ぬより縁終りより一より縁終りより一より縁終りより一よりひき

補 鳩村渾正後 蟬とてなり

後從云亨祿四年細川晴元中浦上掃ア久と括列尾
 後從云亨祿四年細川晴元中浦上掃ア久と括列尾
 為村深西後 貴則敵二人と左右に脇より一よりひき
 小へく死と其より一より縁終りより一より縁終りより一よりひき
 蟬の甲小人の怒より一より縁終りより一より縁終りより一よりひき
 今按ふに非なりと傳肱蟹譜云背殻若鬼狀者眉
 目口鼻分布明白常寶翫之 見于百 けさより一よりひき

そんそ人死して後世に於て事なりや

新右田道灌辞世の状

信託文明十八年太田道灌と叔父正乃と共め小次郎
とてこれに敵十文字に於て道灌の胸に突くを以て
乃敵を道にれい今も敵のみあるやとやけぬに
わへとわ敵と死さう令にわらうに死にわらん
事とてはハ一はふと

今按多し水形り慕京集太田道灌ふく康正元年
乃を敵に殺しよとて敵も御方三もいさ中一と三
日とてこれにいとみわらふとにわらぬされとも
屋敷

武蔵ハつて敵カ水ラ系ウ憲定ノ乃カわらふハ自害
餘兵ありいふされわらんハ落し居る中ハ後
とてこれにわらふとてあか男わらふとてハ中
村治部ハ備後ハ系ハ憲定ハ乃ハわらふとてハ中
屋敷ハに於てこれにわらふとてハ中
乃弱小強二ハにわらふとてハ中
遠目かろうとてハ中
とて強とてハ中
とて強とてハ中
ぬがとてハ中

聖乃わさうや、
 まーけうわさおうは、
 公うえ乃やう、
 けりまれは、
 福てお純身と、
 身といまれも、
 うーそやと、

小栗系

其子助重助重所謂小次郎次郎

其子助重助重所謂小次郎次郎

志保ひて國ありわりの相列校理堂といふ所に

ゆきけぬにそむる強盗中とわたり居る所

宿とかりまねいさうよく浪人の常列れ禿者や

さく定てはふれ財わらんお教へてゐる一僧は

家人といふ毒酒飲もうてゐる人と相うり宿の

ね女とも代わつた今候をとうとうお強盗を新

もてね一酒飲もうじきお強盗小栗代り照姫を

世より照姫とよき中より遊女けりふ小栗に相おれ被

企張るううひおてはとれおでわけぬおとるふ

栗はくちや若もは小栗のひきうにそむて

酒飲と家人といふはさうして酔やぬ小栗か

うそお小栗お神あう印にまお見おれお内小

麻毛りあう紙つお地なまうけるハ盗人とも

あてぬもあつうかゝるおとるに人ともあつ

はハ栗とわかたう候てはさうおあうそわける

小栗とれ紙見ておとるにゆり財宝かーあり

て被るにけり報とすめ片時よあはるる場に

けさよ人を殺とまねいさう人を殺と時え二人

はさく三列はくち強盗人ともハ毒一酔うる家人

小栗系圖

中へは越女と河へ流し一港先小栗と名付し居
 たりまれば一子財寶とわく地よりを獲て以
 分教と名の取にまけり照姫ハ碎る神よりて取
 水よりまされともりともて河に流されハ河より
 削りてそますりけぬ其後永亨れり小栗之列
 たりたり照姫とていひわ種より財寶わ人益人
 成尋経てとくを係しり小栗の子孫代とて
 に居位と少なり補常陸國誌云小栗氏祖出
 桓武天皇子葛原親王親王子曰高見王其子高
 望王始賜姓為平氏任從五位下上総介高望有

六男長曰良望任常陸大掾改名國香其子從五
 位下右馬助貞盛改常陸大掾其子大掾繁盛其
 四男多氣平太夫維幹其子為幹號常陸守其子
 繁幹其四男小栗五郎重義其子十郎重成其子
 次郎重信其子彌次郎朝重其末葉應永年中家
 絶ス世俗おと傳ス小栗判官ス幸ハ右の從より傳り
 おせふこと明ありー此段加ス補

補 月下た後ス芦荻乃後
 俗況云松津國難彼小月下た後といふをたわりて
 くたりまればハそますりけぬ其後永亨れり小栗之列

なりうまうゆゑ然ともんおる見ゆるといひうて而
乃きぬ。同おそくハ杯うへては市の中をばんと云
まふ所。目下は魚アサと云うておる見ゆわひてつ
ゆと云うれ然コトはゆと云うておる見ゆわひてつ

今樓家に大和物語云はゆふふふふのわうに家

して住人わひけり今昔物語云ふ事とて男も女もげと

おはわうさうきれと云ひくたうこれハおとわきハ

少ても有めん女つわう此おかくておれいといふは

糸はわひてさやけくさうきれくハこれ然も

さうへれさうハおれさうと云ひてさうて女も

みいさうり所を屋ぐを此所今昔物語云ハは

一さ所よけ所乃小方う勢ありうハは女とてわひ

然ひて素にならにさうかれと云ふは此男然

わきれは車にわけて難波おゆれおわいあひ

半の男さう志然見ゆと云ふはさうと云ふさう

呼コトはけぬに男も素と知てさう然ゆと云ふあて

わかりさうりやと云ふはさうと云ふさうと云ふ

う此今昔物語云ハ女家と男小方とて書けりわやうと

おとさうりといひてさうと云ふ車にさうせけり

てか此門今昔物語云ハ着さうりけぬ衣然ぬ素男にわさうてゆ

多事な夜、文會信用して、父を死なせしむる事
記^キす。是^シ等の後、成^{セツ}るや、わが生活、^ニモ^{ヨウ}ハ^ンん

猶
信濃國乃季子之孫

信濃云昔信濃國の人系より女代具にてくはけふ
 け女系にわたりて通ひ男わたり有けふはよつ葉
 文を下し系代か系とわりと若志する者わたり
 まかの文代きし祢が系れもえ来ものと云ふハ
 しき事うかき候子息乃児戸隠れ山ちよわり系りと
 しひてけり候しき系ありき母より候しきかひて
 身おそきぬきぬきけりけりて
 身おそきぬきぬきけりけりて

死とくもさせたり程に死に命と云ふ是を
小死といふ是已も命と云ふなりと兒の父より人々
かゝる文より父とわさじ多偏奔なり女に
多皆くある物なりかと我に云ふなり
此れより云ふは死に好くなりなり

廣益俗説辨卷十三

廣益俗説辨卷十四目録

婦女

補

日向髪長媛の伝

一

松浦佐用媛をまねと云ふ伝

補

藤原家持の女子母の令小の伝

新

小井小町系子洗の伝

二

同人鸚鵡の魚一の歌の伝 玉造小町れ伝

新

紫式部樂天の香爐峯の詩の意めて簾後わく

新伝

補

伊勢人痛伊勢物語と云ふ伝

補 桒垣遊女ハ日摘子なりしなり云云ヒカキ

新 天女ニ保乃ホノお系ヒケにヒケ云云少補

三 玉藻タモリ系ヒケ殺コロむ名ナとヒケ云云訂補

四 常盤トキハナ系ヒケ殺コロむ基キ中ナカ殺コロむ云云

五 堀川ホリガハ系ヒケ付ツキ乃ノ死シ釋シヤク長刀チヤウボウ中ナカ殺コロむとヒケ云云訂補

長刀チヤウボウのノ死シ

六 依サトウ成チヤウ乃ノ後コ家ケ系ヒケ殺コロむ乃ノ云云

七 死シ乃ノ云云モト

廣益俗説辨卷十四

井澤長秀

輯録

婦女

補 日向ヒナカ髪カミ長チヤウ媛ヒメ乃ノ死シ

依サトウ成チヤウ乃ノ後コ家ケ系ヒケ殺コロむ乃ノ云云

年トシ依サトウ成チヤウ乃ノ後コ家ケ系ヒケ殺コロむ乃ノ云云

鷲シウ鷲シウ乃ノ死シ乃ノ云云モト

乃ノ死シ乃ノ云云モト

乃ノ死シ乃ノ云云モト

乃ノ死シ乃ノ云云モト

乃ノ死シ乃ノ云云モト

河原乃内小姫と死すと云ふ（此後乃小姫人より云ふ事と云ふ）
のちの事と云ふ（此後乃小姫人より云ふ事と云ふ）

今按るに非なり月日不記云應神天皇十二年春
三月天皇使と遣して駿長姫と死すと云ふ（此後乃小姫人より云ふ事と云ふ）
秋九月駿長姫日向より入る素津邑に居し
守り大鷗鷯（サキキ）と見えて其形乃大鷗（カホヨキ）と感（シ）て
悟り天皇より命を賜ふ（コト）と云ふ（此後乃小姫人より云ふ事と云ふ）
又云仁徳天皇妃日向駿長姫生大弟香皇子（カニカノ）懐妊
女と云ふハ多相遠代考人云々（イニコ）一先乃にわつ次近
年（イニコ）乃書に記せり（モシモ）見たり人か

と云ふ

一松浦佐用姫をまゐり方系

佐用云云松浦佐用姫ハ大伴佐提（トモサヂ）連々妻なり佐用此
右勅（トモサヂ）と云ふ唐（モロコシ）に（モロコシ）一此佐用姫を（モロコシ）死
けり（モロコシ）乃乃乃領巾と云ふて（モロコシ）乃乃乃領巾と云ふて（モロコシ）
乃乃乃領巾と云ふて（モロコシ）乃乃乃領巾と云ふて（モロコシ）
乃乃乃領巾と云ふて（モロコシ）乃乃乃領巾と云ふて（モロコシ）

今按るに佐用姫をまゐり方系
世乃撰集にも記して思ふ次萬葉集山上憶良
詠領巾（ミナモト）摩嶺秋乃序（ミナモト）又伴佐提（ミナモト）以古胡令（ミナモト）と云ふ
藩國（ミナモト）の使と云ふ松浦佐用姫を（ミナモト）乃乃乃領巾と云ふて（ミナモト）
乃乃乃領巾と云ふて（ミナモト）乃乃乃領巾と云ふて（ミナモト）

少よりなりておのふ船状なるみ領巾とよみておれ
成す所は是よりしては山状なる魔の殿と名づく
とれを化教けし事あるく。これの人松浦佐良
つまひしむとぬりしより松人山の名は
ちやうどとわれも石に化ししとハねし又ち
石といふれ和漢抄に。程伊川の院と望ま石ハ
まゝ是江山とてとる人志那のうと此者なり
今天下凡にとる石れをこれわきハ別呼て
石とて二程金書に見くまるとは此をいふ
乃儒と名く

補 後京家持の女母今にいふ所

信濃公登武天皇後京家持は執事なり。内裏にと
て萬葉集とある。そのうとてはまの御方。妻の
乃卯よちとて。家持のうとて。禁裏にわたり
むと。先かけは。あは。陰陽博士。秦安國。これ母
の遠例とわたり。身に。か。終。魚。と。い。は。る。
小母の。金。で。娘。の。死。す。り。家。持。は。事。と。さ。る。
あ。は。つ。ま。か。け。く。と。か。死。か。一。と。衣。に。入。る。牛。乳。馬
乳。乃。鬼。火。車。と。お。れ。ま。う。て。む。死。う。死。骸。と。い。れ。と。人。
や。と。此。娘。の。声。を。う。て。か。う。ん。と。あ。い。ふ。を。う。て

とてをわく事そつかり北と息の下に承とれハ
牛乳馬乳きて感涙我あり一秋ハ同めりぬれよう我
とちをれとる務とわねとれたり定業必死とて
も終一感てまひふたり壽命ハ百歳果報ハ
后と告て飛さるぬ程の如くふたり後ハ聖武帝
乃后とたる光明皇后とヤ勢ハはれたり

今按ふは安持たり安持ハ安承姓よりわつた大伴姓
なり姓氏録と考ふは安承ハ天智屋根令此處ハ
して大伴とるは慶雲令み世の孫天押日令此後也
と書れ相違とある一又光明皇后ハ安持よりわつた

安承は此等の二女たり又敏率と云ハ同小兄ハぬ
たふとてをわくとて安持とつひと貫之と書
ふ古今乃序此とるは古今集ハ醍醐天皇延和
六年甲子とるは聖武天皇即位神龜元年より
百八十二年以後たり其事此乃安承弟ハ魚一
と云ふは続日本紀云延暦四年八月庚寅陸
奥按察使中納言從三位大伴宿禰家持死死後
二十餘日其屍未葬大伴継人竹良等殺種継事
發見下獄案檢之事連家持由是追除名其息永
主等流焉按家持ハ大納言安麻呂孫大納言孫人子古今著史集云大

江^{ミナト}、臣^{ミナト}、衡^{ミナト}、朝^{ミナト}、臣^{ミナト}、乃^{ミナト}、息^{ミナト}、式^{ミナト}、部^{ミナト}、校^{ミナト}、を^{ミナト}、捕^{ミナト}、奉^{ミナト}、周^{ミナト}、朝^{ミナト}、臣^{ミナト}、臣^{ミナト}、を^{ミナト}、病^{ミナト}、と
う^{ミナト}、系^{ミナト}、中^{ミナト}、此^{ミナト}、も^{ミナト}、あ^{ミナト}、く^{ミナト}、か^{ミナト}、け^{ミナト}、へ^{ミナト}、ま^{ミナト}、れ^{ミナト}、ハ^{ミナト}、母^{ミナト}、赤^{ミナト}、深^{ミナト}、遠^{ミナト}、は^{ミナト}、名^{ミナト}、に^{ミナト}、ま
ぬ^{ミナト}、て^{ミナト}、七^{ミナト}、日^{ミナト}、に^{ミナト}、ま^{ミナト}、り^{ミナト}、て^{ミナト}、け^{ミナト}、ま^{ミナト}、ひ^{ミナト}、ハ^{ミナト}、次^{ミナト}、う^{ミナト}、り^{ミナト}、か^{ミナト}、く^{ミナト}、ハ^{ミナト}、す^{ミナト}、と^{ミナト}、や^{ミナト}、ん
わ^{ミナト}、る^{ミナト}、命^{ミナト}、に^{ミナト}、り^{ミナト}、か^{ミナト}、あ^{ミナト}、魚^{ミナト}、一^{ミナト}、也^{ミナト}、や^{ミナト}、て^{ミナト}、七^{ミナト}、日^{ミナト}、に^{ミナト}、ま^{ミナト}、地^{ミナト}、希^{ミナト}、親^{ミナト}、目^{ミナト}、所^{ミナト}
幣^{ミナト}、乃^{ミナト}、志^{ミナト}、て^{ミナト}、に^{ミナト}、書^{ミナト}、つ^{ミナト}、ま^{ミナト}、信^{ミナト}、に^{ミナト}、け^{ミナト}、ぬ^{ミナト}、か^{ミナト}、う^{ミナト}、ん^{ミナト}、と^{ミナト}、い^{ミナト}、は^{ミナト}、あ^{ミナト}、い^{ミナト}、は^{ミナト}、ら^{ミナト}
を^{ミナト}、一^{ミナト}、う^{ミナト}、て^{ミナト}、さ^{ミナト}、て^{ミナト}、さ^{ミナト}、わ^{ミナト}、つ^{ミナト}、ま^{ミナト}、ん^{ミナト}、と^{ミナト}、さ^{ミナト}、う^{ミナト}、か^{ミナト}、^儀、地^{ミナト}、儀^{ミナト}、ま^{ミナト}、り^{ミナト}、ハ^{ミナト}、命^{ミナト}、ハ^{ミナト}
五^{ミナト}、か^{ミナト}、う^{ミナト}、み^{ミナト}、て^{ミナト}、奉^{ミナト}、り^{ミナト}、ま^{ミナト}、信^{ミナト}、ハ^{ミナト}、非^{ミナト}、感^{ミナト}、や^{ミナト}、ま^{ミナト}、き^{ミナト}、ん^{ミナト}、奉^{ミナト}、周^{ミナト}、う^{ミナト}、ま^{ミナト}、
ひ^{ミナト}、う^{ミナト}、か^{ミナト}、ま^{ミナト}、に^{ミナト}、く^{ミナト}、母^{ミナト}、ト^{ミナト}、向^{ミナト}、し^{ミナト}、て^{ミナト}、信^{ミナト}、か^{ミナト}、う^{ミナト}、け^{ミナト}、ま^{ミナト}、地^{ミナト}、う^{ミナト}、ま^{ミナト}、に^{ミナト}
奉^{ミナト}、周^{ミナト}、う^{ミナト}、ま^{ミナト}、く^{ミナト}、な^{ミナト}、ま^{ミナト}、信^{ミナト}、て^{ミナト}、わ^{ミナト}、ぬ^{ミナト}、い^{ミナト}、ま^{ミナト}、り^{ミナト}、と^{ミナト}、も^{ミナト}、母^{ミナト}、代^{ミナト}
う^{ミナト}、一^{ミナト}、な^{ミナト}、ひ^{ミナト}、て^{ミナト}、ハ^{ミナト}、信^{ミナト}、か^{ミナト}、い^{ミナト}、ま^{ミナト}、り^{ミナト}、わ^{ミナト}、ん^{ミナト}、ハ^{ミナト}、不^{ミナト}、孝^{ミナト}、れ^{ミナト}、才^{ミナト}、智^{ミナト}

魚^{ミナト}、一^{ミナト}、也^{ミナト}、さ^{ミナト}、ひ^{ミナト}、て^{ミナト}、信^{ミナト}、か^{ミナト}、ふ^{ミナト}、ま^{ミナト}、り^{ミナト}、と^{ミナト}、マ^{ミナト}、系^{ミナト}、信^{ミナト}、ハ^{ミナト}、母^{ミナト}、代^{ミナト}、小^{ミナト}、り^{ミナト}、も
ア^{ミナト}、そ^{ミナト}、命^{ミナト}、あ^{ミナト}、あ^{ミナト}、へ^{ミナト}、さ^{ミナト}、あ^{ミナト}、ハ^{ミナト}、す^{ミナト}、と^{ミナト}、や^{ミナト}、う^{ミナト}、ふ^{ミナト}、も^{ミナト}、ま^{ミナト}、れ^{ミナト}、と^{ミナト}、ま^{ミナト}、く
秋^{ミナト}、い^{ミナト}、ろ^{ミナト}、ち^{ミナト}、を^{ミナト}、め^{ミナト}、り^{ミナト}、て^{ミナト}、母^{ミナト}、代^{ミナト}、ま^{ミナト}、す^{ミナト}、と^{ミナト}、系^{ミナト}、う^{ミナト}、務^{ミナト}、終^{ミナト}、へ^{ミナト}、と^{ミナト}、い^{ミナト}、ろ^{ミナト}、と
ま^{ミナト}、れ^{ミナト}、ハ^{ミナト}、非^{ミナト}、わ^{ミナト}、れ^{ミナト}、と^{ミナト}、て^{ミナト}、所^{ミナト}、あ^{ミナト}、す^{ミナト}、と^{ミナト}、系^{ミナト}、や^{ミナト}、わ^{ミナト}、う^{ミナト}、ま^{ミナト}、ん^{ミナト}、母^{ミナト}、ま^{ミナト}、を^{ミナト}
小^{ミナト}、事^{ミナト}、ゆ^{ミナト}、急^{ミナト}、め^{ミナト}、く^{ミナト}、信^{ミナト}、か^{ミナト}、り^{ミナト}、け^{ミナト}、ぬ^{ミナト}、信^{ミナト}、と^{ミナト}、う^{ミナト}、わ^{ミナト}、さ^{ミナト}、せ^{ミナト}、仍^{ミナト}、信^{ミナト}、代^{ミナト}
信^{ミナト}、と^{ミナト}、系^{ミナト}、信^{ミナト}、と^{ミナト}、れ^{ミナト}、な^{ミナト}、り

新小井小町系子洗の信

信^{ミナト}、信^{ミナト}、云^{ミナト}、延^{ミナト}、結^{ミナト}、帝^{ミナト}、乃^{ミナト}、所^{ミナト}、字^{ミナト}、内^{ミナト}、裏^{ミナト}、中^{ミナト}、て^{ミナト}、所^{ミナト}、秋^{ミナト}、合^{ミナト}、わ^{ミナト}、る^{ミナト}、人^{ミナト}、あ^{ミナト}、ま^{ミナト}、と^{ミナト}、く
う^{ミナト}、信^{ミナト}、て^{ミナト}、大^{ミナト}、伴^{ミナト}、黒^{ミナト}、う^{ミナト}、合^{ミナト}、ハ^{ミナト}、小^{ミナト}、井^{ミナト}、小^{ミナト}、町^{ミナト}、と^{ミナト}、定^{ミナト}、め^{ミナト}、ら^{ミナト}、信^{ミナト}、と^{ミナト}、ま^{ミナト}、り^{ミナト}、と^{ミナト}、ハ^{ミナト}
系^{ミナト}、信^{ミナト}、ハ^{ミナト}、小^{ミナト}、町^{ミナト}、ハ^{ミナト}、秋^{ミナト}、乃^{ミナト}、よ^{ミナト}、ま^{ミナト}、れ^{ミナト}、と^{ミナト}、て^{ミナト}、ま^{ミナト}、う^{ミナト}、信^{ミナト}、ハ^{ミナト}、な^{ミナト}、す^{ミナト}、と^{ミナト}、い^{ミナト}、

のうろく残と宵吟せぬ事の有す一まゝとせんそ小
町う泉小志のひよりそゆよ小町ハ水色ミナノイロもやうカ預
めまうぬに何残す程とてう紀事此浪乃う程く
おのゝ事ゆんと吟と思ふまゝううのひは歌とあ
葉集に書くまゝと念とて中化居う時と卯月
方々を浪原及めて町舎ツカイなり市和ふは小町とらめ
九河内躬純ミツチノキツラ是之を遺の府生主生忠岑ミヅノタケミツ左太小若社
一たろくうふ事と程尺ととおと帝貫ミカドとて是小町
歌とてゆ一紀事此浪乃う程くおのゝ事ゆんと
紀事此浪乃う程くおのゝ事ゆんと

わろ事ハ列府けうと感一程とて此大伴思ふ子、
みきて是ハ古歌とて万葉集に見く作とて云ておの
見路一ひふは思ふうとて此まうんさうとをれハ小町
大よむとらさうと見ふに此此分又字此書つとて
ひまうぬと我事とて吟とて此思ふとて字一て書カキふ
まゝ思ふんとてひまうんさうに何代もてわふふとて
うと入筆おれハ歌乃も一題タイゆとてふとくを落け
後ハ小町ハ市麿美にわうり思ふハ記流ハルとてたとて
今按ふに延喜エキキ帝市歌合ハ小町起うとて那方う
小町うた一まゝ此年月不恒タチとて人の中も在る葉平陸

奥國八十橋よりいって小町の關驛と見え、幸江家
 次第古事終東齋を筆袋より袖中抄に記す
 等ふふゆゑ後業平ハ陽成帝御宇元慶四年に
 卒す也三代實錄よりわづけり記より醍醐帝即位
 乃昌泰元年ミキウタシよりハ十八年ふ及び今も又黒土ハ大伴
 多代孫なりコタ近衛帝ヨシノふけりて近江ミナモト
 國司コノリと形家古今集より大伴黒土わづらやかと
 乃山代までこれハか稱をも見ゆる君よりふと稱ハ是ハ
 今上乃所へ名わをれりて也わう今上ハ醍醐天皇
 なり古今集ハ近衛元年四月十八日ふえりて家書へ

此故少く只と云ふおりの志契耶よ大なるふ
 入る山さきに黒き力の神とやつかみいふ次是
 とむいふ黒き力の神にたしかまとなつてた
 ちてた事何なる書中にもかくてなり信託の
 遠と知へ

二小所フラム鸚鵡フラム其シ一乃ナニ秋アキの祝イハヒ附ツケ玉タマ造ツクリ小所フラム乃ナニ祝イハヒ
 信シロ既シテ云イフ小所フラム小所フラムハ安ヤス好ヨシ教シラセ司シ小所フラム良ヨシ實サシ女メ而ニ陽ヨウ成セイ帝テイの
 女メ女メとれレ及ツキ事コト々々々々客キヤク色シキわワてテ倭ワ秋アキニ遠トウきキ後ノチ小所フラム氣キ
 して乞コッ食シキとトるル今イマ校コウ乃ノ関カンと遠トウきキ乃ノ店テンとトびビとトいイ祝イハヒ其シ
 乃ノ人ヒトはハものモノとトもモてテ居イるルけケぬヌにニ帝ミカド乃ノ家イヘとトいイふフ者モノをヲ執シテ使ス

中へて 雲此上ハわろしむうにわろしむうとみへて海
 まれ乃内やゆへに北より所製とて一賜とまれハ
 小町 雲うよとわろしむうにわろしむうとみへて海
 内をわろしむうとて文子とてわろしむうとて海
 中より又小町とて遠のきよて雲海よりわて同是れわろ
 雲海に代記してとて遠小町とて今世よりとて
 今按ある小町の雲籍うへて乃教世に選集小町
 家集ふもわてわろしむうにわろしむうとみへて海
 覺兆は女納言通憲信西子成範振町中配不うろ
 久されて内裏へまうりわろしむうにわろしむうとみへて海

中へてわろしむうにわろしむうとみへて海
 中より昔とてわろしむうにわろしむうとみへて海
 所籍と見へてわろしむうにわろしむうとみへて海
 出へてわろしむうにわろしむうとみへて海
 小町と見へてわろしむうにわろしむうとみへて海
 中へてわろしむうにわろしむうとみへて海
 中より昔とてわろしむうにわろしむうとみへて海
 所籍と見へてわろしむうにわろしむうとみへて海
 出へてわろしむうにわろしむうとみへて海
 小町と見へてわろしむうにわろしむうとみへて海
 中へてわろしむうにわろしむうとみへて海
 中より昔とてわろしむうにわろしむうとみへて海
 所籍と見へてわろしむうにわろしむうとみへて海
 出へてわろしむうにわろしむうとみへて海
 小町と見へてわろしむうにわろしむうとみへて海

みかろ——わげさ終へ見とせうくす此わあふれは
ろろそせ終ふくも終さう事い知れとふさ今
まんとあひもわらうざうの事な残けとやれ人あはら
屋さあめりといふもわらう残考へあうへ——

補 伊勢左補伊勢物語と書況

佐況云伊勢左補ハ伊勢物語とめでせうくあふして
世ふこころえまう

今按ふは伊勢物語と書——ハ伊勢なり伊勢左補
中をわらう伊勢ハ宇多帝此女所なり伊勢左補ハ
上東門院の侍女なり二人と偶——て一人と覺へる

故なり

とせの書よけあふと二人とせ

大系圖よ按ふ伊勢

ハ高系内麻呂二代孫大和と継蔭女なり

七系高系
女居寛平

は室所
息也

伊勢左補ハ大中臣氏傳經孫女なり

中門て佐況乃相違と知へ——

補 橘垣遊女ハ白拍子也——と云況

佐況云びう——藤原乃大宰府より橘垣と川以て

佐——白拍子後中とたうへて肥後乃白川とてふまう

そ川乃わらう残高系貞範通——と此あやわまこと

ひ——まうそて出て見れ 年姁まわらうらうも白

川乃まうとむまてむふけあう高系範とていさうたけい

五

但し今之時代乃事小異
然わい得又抄師家並其

小智るわを
るを

一 天よはれねえとて
 又へもく丹後乃酒は深山の原を井わりま井と
 お川く天女をてあは落し時一は和素佐助
 和素佐助とてふも此天女をぬきあは落しとてく一てつもてふかのうきと
 又て後よ作とて来大振たま天女のかは落せうおゆきかたりぬき
 又てお衣とてりねきあてけもてふりまあと一男子はうじま後女お衣と
 とてふ一天よはれねえとてふりま子盛とてておと号を天人のふといふ

今按予、搜神後化は豫章新喻縣北男子田中
中、鳥をけて女とけりわその最末所を見せむ
ふて其ぬき衣を衣然とくかど付たり女冠
と衣物を別はさるそ婦と一之女といひ後小
彼婦子状して父よりうき衣とけり希一志と
記さる補廣輿記云江西南昌府城南隅洗馬池舊
傳灌嬰洗馬處職方衆云嘗有年廿一見美
女七人脱彩衣岸側浴池中二年少戲藏其一諸女
浴畢就衣化白鵲去獨失衣女留隨至年廿一家爲
夫婦約以三年還其衣亦飛
去故又號浴仙池下同談
和漢同日の妄誕なり
熟して文育なるに代ハ四海乃一天地なり衣志して

王族と別はさうして婦と一と女と一は後小
彼婦と一して父より女と一して希一と云ふと

廣輿記云江西南昌府城南隅洗馬池舊傳灌嬰洗馬處藏方輿云嘗有碑見矣

脱彩衣岸側浴池中一年少戲戴其一ヲ諸女

衣^ヲ化^ニ白^ク鶴^ト去^ル獨^ニ失^レ衣^ヲ女^ヲ留^メ隨^テ至^ニ年^一於^カ家^ニ爲^ス

以_ニ三_一年_ヲ還_ニ其衣_一亦_ラ脫

浴仙池又同談
和漢同是妄說

大商形を此の圖毎の一七九代迄了りて

如
一
三
五
七
九
十一
十三
十五
十七
十九
二十一
二十三
二十五
二十七
二十九
三十一
三十三
三十五
三十七
三十九
四十一
四十三
四十五
四十七
四十九
五十一
五十三
五十五
五十七
五十九
六十一
六十三
六十五
六十七
六十九
七十一
七十三
七十五
七十七
七十九
八十一
八十三
八十五
八十七
八十九
九十一
九十三
九十五
九十七
九十九
一百

世界之天下
世界之中
世界之內

[illegible]

乳とあふれぬ小面電瘤名乃ふと天女と

一、

凡と信と教とを以て此段架補

25

穀生石と形多様

丁巳年時乙未集前中三
一

傳陳太僕女王應前明于忠肅公下

△ 門人 上 卷 八

子之川人

中平水致予の述一丁に去鬼心す

自

凡此皆後之妙不可言也

三
一
二

救世名方卷之五

ホッス

平江一夜府禪一頌と喰拂子と云て

元粹錄卷之四

石代より碑くさるる

今按ふ。毒殺なりと云ふ。彼が頃中れ殺せしむ
砒石ゆてらふふ奴も食歟斃せ死する故に性成
好む毒玉摩木う事い他うか。才教もたなり
実源よりくさる代きりて遷代あへ。教もたなり
けうさる代真列金津磐梯山あも毒石ありとれ
ゆふさる代りかた死を名付きて人捕りくさる
此よりくさる補日本書紀考云按列東生歌林も村に教せぬや
蟬石もくさる大和を云云然後慈門のくさるは氣うさる。と毒石や
紀列もせり玉川あも毒わり空海人か飲んて死せ
てくさるてハ池や玉川に人殺るゆへくさる真れ玉川

乃あてり死り

補日本書紀考云石見國二万部多海の湖あてり
流るるの温泉水より死ぬ中し毒あり流るるのくさるを
云人も地獄といふ又然後のくさるは流るるのくさるを
其餘の

獸草木魚蟲水土も毒あり事かほく和漢書
に及くさるりわふ皆玉摩くさるなりや 此段加補

四 常盤示る墓中殺るる説

俗説云常盤ハ深義朝の妻めて長経代母なり
朝殺死乃後平法盛入る此妻とあれり牛若殺る
状をいひて真列より下敷に法盛入るれといふ
ア長盤と追とてくさるじへあかきくさる牛若殺
るより真列より下敷とて濃弱青墓めて盛徳よりくさる

中より他人今も墓なりと云はれ申を盤と云ふ

今據ふよけ来いつまの事おも思ひて次平居物語に
當盤は盛ふおもて娘一人ありけりといふ事
と云ふ初て後ハ一條の天龍を成れり方に云ひて
子と云ふ事と云ふ事なりやと云ふ盛衰記は長成の
子を盤腹に付候事成とて有る判官義経は明
に中よりひて西國へ渡りて其義成も死なうと云
おきりといふ大物の浦中へちりてにあり和泉國の
藤原と云ふ所なりと云はれ成りて云ふを盤の後ふと
成る事おも思ひて次平居物語に云ふ事なりと云ふ
奥列下向の

と此なりと云ふ事と云ふ想像にて妄作と云ふ事なり
他人ありて實と云ふ他人も墓なりと云はれ盤の墓を
わやするといふ事なり

五 堀川夜討乃時靜長刀状を以て教と云ふなり

在刀乃後

信長云云佐治堀川夜討乃時靜長刀状を以て教と
乃教と云ふ事なりけり教は後世に云ふ刀状と云ふ
作を靜形と云ふ

今據ふよ堀川夜討乃時靜長刀状を以て教と云ふ
さう事義経記盛衰記おも思ひて次平居物語に
鍛冶諸小澤

川多藝志津鍛冶志津三郎兼氏後來相列爲正
宗弟子能作長刀稱之世號志津象やうりやう
は志津形紙張りて靜寂と相傳へて川並村に傳
へて代附會せられたるなり

六傳殿在司の後家義經よりなり

信統云佐殿在司ハ継信忠信の父なり二人名も義經
小屬せしめておのづから後を継ぎし子とて義經志
まひをけし病とありて六傳よりひき二人の傳
小吏たりて繼信とせ繼信忠信ありといふや在司の
後ありしむと後在司死し其ハ妻ありてありて

義經奥羽小落ゆき一時代継信の子孫とて義經
小吏たりて死して二傳にありて一傳は繼信忠信
事しむるハ義經ハ傳めて繼信の戦死を以て忠信の
なりて義經より事わりて一傳は忠信の傳へるなり
今按ふと東鑑と考據し文治五年七月頼朝奥羽
乃泰衡征伐代時泰衡弟信忠代佐殿在司
目諱元治繼
信忠佐父也
河邊太郎高經伊賀良因七郎も重代

引具一石取板北上と陣と張布と經念方より常
陸尉者爲宗同次郎爲重同之郎資綱同四郎爲
家兄弟四人多勢と率て伊達郡澤邊より入陣

中名はつて義賊射けりふ小座目以下一處よりて
賊一六のき資得る家之人多賊負うる新者に
ほし御通ともなる家もふし御通あやうひも御通
佐敷座目以下此共十八人二所あやうち死すと見えり
信託乃相違と考へてふ人

七 花乃本柄とて此れ就

信託云日向國極田といふ所は天を更とらる者なり此
ひと先わりの花の市と名づく一説は八幡川大細云一説は
仲幸といふ人後國緒云天日神小甲は信託れ
一人はひとあやう花の市と名づく
かり屋と後雲にけりて居一先けぬといはれり

たゞ男ありてむきく女に通次父母これ就けり
海うもやに通次親いふあやう人そとらふひとあやう
水干之帽子就着る男夜とあやうかあやうに曉に
親親と人々名就きすといふ母むと先みそへあ
かの人といふと此計といひて草環はけりぬあ男
乃襟より袖よりそと衣は乃男あり曉にあは乃
て女計就きいへる聖朝父母といふて共は縁就
あしやうて尋ゆに日向を渡れさうひ姫嶽
入田で祖母乃席よりる席中より痛吟乃色わりわ
あやうらけりさうは席中よりこゑて我を是死にけり

飛屋の上より来りそふぬきうとて父母麻と伴
 してきて縁をけり計とて山にて祇人の經堂よりけ
 明且縁よりあがりひて尋ねるといひて八幡穴より
 越えて節渡山を経て古井に入て室山よりそふ祇大神
 まゐりて代きて其縁の遺とてかといひかきて三榮
 わりて此殿より三輪山とて山をたぐ大に輪祇社といふ
 大祇初長ハ素依能雄令云世の孫ありて大國に祇
 といふ大國より三榮の備前耳乃女玉根姫成妻を娶い
 去りて宜いなり縁をけりといふをいふ玉根姫成妻
 ありといふ山にて妻をいふといふ茅渟縣陶邑とて
 法山とてさき草花のこまありといふといふ
 わりてこれより山にて代大に三榮といふ
 皇の姑倭迹々日百襲姫令成太物主此書といふ
 日か紀云崇祇天

まもそ神童み登見人として有れと申
ツシヒミヤ
 襲娘ま少保て曰君常み登すを結い所あゆ
ツネキミツヨヒミヤ
 おもき教とん取く然れど初うくハ志しや
ツノミカホ
 まり疾へ明且保て矢藤乃厥候と見む大祢こよ
コトハリイヤチゴ
 言理物能なり我明且汝う様等み入あ所かへ
ワニアケノアレキミ
 わり形は松とろく事おられ姫をうちらにこそ張
カタナリ
 わーびわく歌を結て様等代なれハ矢藤小蛇なり
ミツクレケ
 そも出さ大なる教丑のそ〜姫をうくこそさけひあく
ヒホ
 時よ大祢忽よ人な形は化してこそ書よ偶々姑さま
ケ
 なく後志つひとして吾然とめり一老の秋もと海と
サレ

ちのうかんく大屋と雖も所諸山よれお子娘わよ
 此るてあも成梅の着成を以て隆次つさく
 薨とわり是等れ後をわやまり傳ふを此なり
 大神とわがごと訓とれいおかんがこれ略めて又こ
 わやも訓と既よ八正史姓氏承少も大神氏を
 此をまされハ実小上なりこれあり戰大童以來れ
 氏おわつ又尾形乃事ハ源順と和名類聚抄延
 年中既よ緒方ア成れも緒方也尾形く訓同
 此ぬ小通同して記され乃をかんそ蛇尾わぬ
 ぬらんきとハ富士と不二もかき伝ふく

あもけきくひむかや一是等とまめて管統れわ
 やまろ成なり



